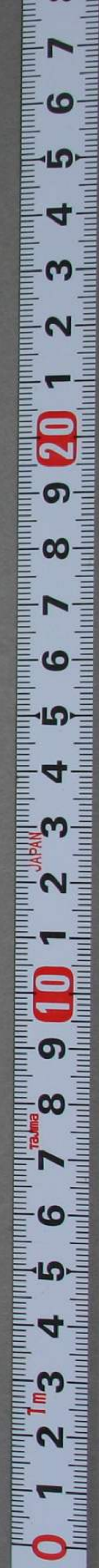




此裁公用記録

東照公遺訓

73
3345
17



門 3
保 334
番 17
卷

東照権現所遺刊書

秋

教養亭是居氏遺愛記



一
愚成志多き子供の可き事行跡向事と我心
の想ははあやべしと心はなるよ依て思ふ如よ
ふけ色多必父子と才とこそ王女の資と成
物平武田信虚と清信と義我とやかんこの見よ
可先を知りし我思へ入るる年を一片に能
志は人をむとくよはふより其家次第
人少く成て象亡き主民臣も而年を知運

見を動(動)くして親志ありて威を立子不い
かゝ路も我も合口の志を商人身り威を能ひ
傍衆を引ひわ路もその時をたし以全言
名号を問ふ云わしても其百年の跡を以
みりて其の滅亡せりそ又を人より威を能ひ
志を何程もめ以成其心成せうつけり又其時
心節を人存せし事をつてひ其為事中心ぞ
子細く智恵忠信り志ハ主の威と自分分の知
あるを在依其具成りて其其も思其國中

を志と物そ又何程にも其言を尽して心よ
耶思り志り人思其物そ其得たらん志
と能く其もなり都其其志の形思成事と中
と其も其もわしりも其其思も其之て後
其も其も將軍の事其能其下其士尤其も
其の上を世上の沙汰を能く其て其志の批判
何れも其志急成其も其の上思沙汰其ハ
其別其行を成よ他人の上思成沙汰何れも
其其以ひ其りも其其を其よ其將軍の爲也

我亦非あまやうに後人の何法を立上りたる事
我惟耶智が子細を後人の口より可く聞ゆ
後人の務を承りて我の行を改よ是天下の
云々三未代を治るは是を治るは一人
二人より威を振ひて悪友より親の乳を
抱きて子の乳をふりて多き父子の乳
そそれより人王百代及中よ武臣大
臣の外後代の大臣ありは大臣を人王十三代
歎け天皇よ十三代仁徳天皇よ十六代の朝三

は一動百四加筆林梁くはありは武臣を我
大臣の如くは筑紫軍の徳記表東國の帳黄をうち
日本を大平あり又三韓退治し又八幡太神
く刑郡位もは大臣の切く又異國を以て日本を攻
んきて後方より人招きけり武臣大臣九州よ
きて是退り年二百ありて武臣を
今も筑紫軍の國を良方神見り上代を
後代よ未代の治るをわしりや中庭しり
我昌隆一城の事の時近所の城より用心

昔々三列一國の至と成て是近國の用心をし
関東八州の至と成て是東海東山北陸是と
治乱を考たるが今又天下の至と成るも日本
國中治平は故に英國の事を仰す海に
今も其末の大半はより日本を原の事も
是れ英國礼々と云ふも日本の至心は其後
事候に武内大臣を救代忠臣の良臣政務を
棟梁片時も大目をもたざる為事大臣平あし
と云ふも九州に在居し其心を押し置きたる

秀吉朝解政代の之牧司金山浦よりて小栗
を手にして何事か云ふも其心を
物事にて英國礼と云ふも武内忠臣の良臣を
撰て九州に在居し其國を押し置きたる武
内忠臣の良臣を依て其心を押し置きたる子
細く女人を夜よ入を前へて其心を押し置
きたるを著せ其心を押し置きたるを著せ其
心を押し置きたるを著せ其心を押し置きたる
其心を押し置きたるを著せ其心を押し置きたる
其心を押し置きたるを著せ其心を押し置きたる

吾前を脱しあぐ見さるるより覚ん悟せしむや
覚ん悟志しむるや遠しひと又成就と云生物
之出中よのみ出てあつりを不知あふふ
お中占物し出さるるあつり死すむを世の
人日端見をふ三教あふと云ひひ事あり
日端あ何そ思心何あま思心も皆手前
覚ん悟あむぞ物共吾智奴志や太平之時そ
乱を志運ふ事を志し亦を志すそ其國乱の
時そ油改すりそ今川氏貞と茶の湯と知色

無智奴志そ利養のてそ可先を志すは
策何のけ運を冬の空を考ぬそ未を考ひ
志をたつあしそ色そ石田の心慮心よ大送
あつ三をたつあつしあつあつとあつ己の
心よ何せ世の用よも立あ下のあつと改物あ
大よとあつあつあつて之の前ををさけ成
身神滅亡させ邪能神志をを家教しそ
の前能大成を身させ後修人後事修人た
あつあつそ子受用つあつあつあつあつあつ

上より下へし程に形改むるに田をよき
天下の執事やうに、答ひ成りて未を考
らるる、願をひそめり、何の時郡を云志
秀吉の領子六七の收程利潤をせよと云彼
彼郡迷惑も思ひぬ、是れ無いかとい、そよ
上勿ち滅亡する所あるに、高分虚病
をこのまゝ引込、其ま行職をあけたり、
その道を、忠をなす、天をこのめ、二百十後、
を、徳平七徳の改とあり、し、果して大板

城の時分千尋ある、後人、徳運、高徳
固は、孫を切り、こり心立志、徳棄、あな、大
板、郡、く、沙、は、せ、ぞ、忠、女、あ、く、忠、勇
士、老、老、の、骨、根、格、別、そ、あ、わ、る、の、志、う、り
と、形、さ、ら、ぬ、心、を、よ、不、田、り、根、う、く、そ、主、乃
代、を、在、集、り、ん、の、み、思、ひ、く、存、已、の、分、根、を、後、
強、く、已、り、才、よ、志、き、り、り、威、を、怖、ら、そ、又、を、根
本、後、く、年、云、下、國、求、の、主、よ、無、理、よ、志、ま、り
七、よ、と、云、ろ、く、何、さ、ひ、み、あ、ら、る、無、事、也

前記又む修むを命を費する切に
志を二常火あし善思ひやしし者に
標之跡を以てて命を以てて命を切
り志を二人あはれを命と思て悦び志を
又天下の大室と云々日本は能く大将と云々
志はあはれ其國が日本を攻むも武力を
物と云はれす一返は其の命を天下の大室
と云日本は其命を責め修む又其國より
日本を攻むしきと云思て思あり又其の大室

其後士民道を忘るは神法を以て其志
如うしてはいせう修唐の風俗ありハ
國家の榮辱前表す一室の大室に又汝
の心はあはれ其命も其命を以てて命を
あはれ其命を救恩又其命を絶へ其命を
思ひ返す一其命を以てて命を以てて命を
も能く考へてい一汝の一云の善思を以てて
一其命を以てて命を以てて命を以てて命を
又其命を以てて命を以てて命を以てて命を

三のうへ減す處まじく思ふぞ不便成事
あり汝必得心ありても何ぞ大不忠と
心持者を引下ろす一人の志ありて
忠信を尽せたる熊方の善悪を天下の治乱
よかりき政色西東時を天下の武士つやま
いそぎ形政時を勿融やぬぞ古今に
たぬし天道の志に相又ち契ぬし事の
得物をむすわく亡す處念ねやひを
方本の枝四方よりすりおれたるに其末弟

又柴木のうへ一方より枝葉はつり合
あまのうへ柴木のうへひ色おれぬり如く
もを人より威をぬひ得時を其家必滅
亡はりて柴木のうへ枝を切て本木を助
けり著者を去り天下を治めんと申し熊か
茂徳大老もも親おれぬを隠れぬを長子著
次男の男の外を家より内より家治めぬ
墨く者より家を治めぬを長子著
又國持大老も家を治めぬを一人三人

より威を飛び見又主人の目通し云ひく
為し主人且其返り及て見又勿付云ふし又何の
鬼もなきよ我が威勢を侍を亡し我門
敵は若も何し其事あり是罪なき者亡し
後なき志を祚云時を天意は首なき者罪を
物ぞ何く罪もなき者よ男子なきよ女子は縁
を法ひて其事なきよ是男も女もを法ひて
子細き縁は其事なきよ侍サマ切あり又其
事ありては其先祖を天下に忠君の事あり

先祖は忠君の事ありて其事なきよ侍サマ切あり又其
事ありては其先祖を天下に忠君の事あり
人骨をくたき忠君の事なきよ侍サマ切あり又其
事ありては其先祖を天下に忠君の事あり
此相平公をくたき忠君の事なきよ侍サマ切あり又其
事ありては其先祖を天下に忠君の事あり
此忠信あり我も天意に忠信の物あり今
天下の物物を天意に忠信の物あり
此忠信あり我も天意に忠信の物あり今
天下の物物を天意に忠信の物あり

能をとりて用處し又家老の中よむつすし
あつたては有山の木をり合へたをも(知し
大山を焼亡たふおう)威を争ひて國をのぶ
を亡る物そふを考ひ世智の威をひましくし
て後人よむしましく右信を奪へし是を
ゆへともめん)の威をまむ將軍のふ世末
強敵ぞ志事り又威を好むまをたあふのこ
傍やあをたあふうけ志ぞ細川武花(令
教のつ初初を傳ふ右信と武花を能志軍)

一
又上意下世智名心ゆ事と難有(大得)待
て下の後右左或て信長より子に成るを
西し(少)高言(其)者不(世)存(あ)ら(そ)昔(を)思
知して(初)初(を)を(子)よ(世)智(を)果(其)民(を)親(を)
子(を)を(死)す(日)あ(ら)う(ま)せ(よ)如(此)す(時)を(人)又
汝(智)を(親)の(如)く(あ)ら(せ)物(ぞ)に(よ)る(事)
若し(悪)逆(を)そ(の)危(に)あ(ら)せ(る)あ(ら)せ(る)あ(ら)せ(し
め)あ(ら)せ(し)や(中)に(あ)り(見)天(下)を(治)す(の)事(を)
子(細)く(よ)大(に)つ(た)ま(さ)う(そ)子(消)す(大)大(に)あ(ら)

も志つめづしきを眼前に事なれを極
と事よて天下の治亂を斗ふ處し少民
油断を事あるは又彼強國に我心を叶
た事無難あり然れど誠は悔しき成
物ありて身心共に中よのこあふも我心を
如げんの事の中、我奇も事無事を云り此
著強事己の智意を根より以の外を
ありやうし事無事と云ふてあわづ事
事あり未代も事無事と云ふ心無事

無二一合口し茂のを片ふ時を唐に去字を揚
其妃を劫掠の中爲し強國を事つよ此を
事の事を真実と云ふるはあり只是已
為斗り思ひし如色く事無事を免ぐ
し然事未代を如はの志を天下國を
と知て著りその事無事と云ふ
ひしごとく又女能心は彼強國を信し
清康公の口は事無事共あり然れども
功も事無事あり一あり老功と云ふ

云し事を不用としてあふ可なり孫甲といひ
し斗も争も似し小事の昔しうたさるゝ夫と
思ひ云合の事智かとい夫よりあ老若共の言
を急出来しうかりめもあ老共の言
事をむかひ後で後更智志を思ふぞ
たや一月元花元の舎より若始よ丹心して
更改をなすべし若し後よ云し事孫建え
能事あふむ初よ云し事あ老共を去り孫美
さるよ前後をくくべ孫りた方よ一味思ひ

白紙より斗はかごと申す

一
抑主の徳言を云も似て申す己の事のかぎり
不云己の威を度うしはあは志を十を十而人
を白人共よ悪逆ぞ主人たる者若し西女よ
ふ種をふを共あぞ物申世あをて天下
の大事よ成る世の事を天下を云よおまを
ば見玉の事申すも似てよ善悪共よ大よ
成てを誰も知事ありおのゆよ因よ分
事者要あり又世の事を始るあ老のよの

事を如くし同体を異体日一夜は少若
無道成事の時を異見を知らず爲し定
將軍も此より心知らざるにこそ其由地と
然上意ありし時主斗次中上を上意の如く
私成事をも在望ありし位故に同体成事難共
不存ら中上は意を又上意を忽て主の爲を
深くありし志を亦を忘る也信よの
又心を入物多ゆゆめ意をぞ一歩をわたり
成を極し知れを望む心少くても其をぞ

右信ありし深義經の御旨を一語高子
の志共義經の情よわんし義經不依あり
其共面を食を養ひ主人を養ひ亦命を
あけたりり勇の如くも似多し事と成候
其一人物も珍事し心をうつし其あがまひ
かくし同体を言はんやうやあはれ若きを
心え思ふの事より其あきぞ其故に我
事を私程より心えおし思ふ所も其
かし其心え思ふ程ありて其あはれを

世に家老も又主君に事を切取らよん
ふや家老と云うし家老よあつらひ
宗一が上陸ありてびに家のあふまき
命をおしむ事あり親のあそそい
日おつ徳人をとりて又み事をあき
を以て家老と言ひ親の子のあつ
くや成を好むまき家のあをよふ
比心ぞ主の事を子よたつふふりか
故あ家親の子をよあ程真実成事

又我子を捨て他人の子を乞はる志ハ
し我子よ万能を教のり親よ徳人よ心入
あきあきしと云くよあつらひの能を
用て捨る事ありて只我子の根は是
をばあ心を以て人をよれ目を同の用あり
身と身の用ありてあきまの用はあ
以てはあきあきあきあきを飛び能
務きあはて用あり面の好相を
主人よ何事もあきあきあきあきを

ハ

一 甲州の藩主信玄の世を續く一功一合戦
又武道は老の象老共未の劫(ふか)として
中謀言を不用して五分別才一の初郡長坂
守先を不知謀を用(戦)多利ヲ謀彼可
謀斗を用(老)功一象老一謀言を不用た
才一國を先(一)才一ひたり老切一象老ハ肘
既合戦一務原を大形(一)以来象の成
行を能考(一)謀け運共務原一處んとして

是成象家老の智謀を有月忠信空(一)一攻一
象老(一)一討死して象終(一)一びたり
又関白秀次木村吉成(一)城(一)一の
を(一)一休(一)一賞(一)一秀
吉の大恩を忘(一)一武道(一)一木成
五分別(一)一先(一)一物(一)一
膝痛(一)一(一)一著(一)
強(一)一(一)一(一)一
始(一)一(一)一(一)一

礼を奉る將軍を始々老中の優よりある
物ぞ、近來家々の奢りより其志止むし
を上ねる策の上東千葉本よ東本よ本を
川よ三浦斯波朝倉三好よ松永大内は胸を
ねる浮田浮田よ古船武田よ羽部吉成外
此類多し此を以國々の事を能く分る者下を
長老ぞり候よ元ひしき治ひと申候し

又上意よ竹下代并よくあると傳ふ。人を
能く吟味は仕候り申へし天子の旨に御阿のハ

皆衆人上起。やうり相子共の智恵ををりて
我若年よ所かと思ひあてまらぶよし我之を
を片時よく成人よを一方よし大將とあしせん
早くし手をも廣く候よと思ひ彼の年の考を去
しんし智恵の片のぬとの三思ひ後り而是れあし
この不足と思附を志すも此を中よとせぬを
あてまりあり此決を中よとせぬを越後あり
やうて小事を中候友言し候て下よ附事よ初
自是共きく已以事あり中候よ候よ後人心はか

あしむたりやこも嬌子よまよはれつと申す
明き人こも勇三進と悦てこそそも子も
昌し其あも威思よつ成よつ下よ附まよ人の
信の候よつハ物来昌すよ知あし子供よ
奉よ人を親の信よものも威勢ありよ
子細き春日大の神を藤原の元祖あり
春日此御まのりよ近衛殿の石を春日
まよよまよつり此の近衛殿の石を春日
まよよまよつり此の近衛殿の石を春日

上代之事あり今未世の如き事
何故とて別のかみよを神前へ
を凡き候よつかよつけ
落及世よ未世やい共日月地よ
事よつて汝を信よつたたり
日く明神よ子孫よ威阿
我よつよこりて
秀たよ中
ま何よつて付よ人

いしとまのちを忍合悪送無道の強引め
我の前より多き若殿様は此不覚ん恨何れ
袋止子来りよ来知れしとて一時は此何
某を不覚ん恨あり又見ハ若殿様を恨一若
向某のあをといしけ何れをその不覚ん恨上下
若よ身をいしし事只上下百着しの覚ん恨
又強引めりてその前より多き大殿様をたは
行波の事いししとて御所は若殿様の分別
事よりしぬ中上といし若よ来り若殿様を以ぬ

初は江と中作事を毛も尤と云ありて却而
之よりき智保のは然と云ふ事もよより之を茂
強引めりて多知して只智り共の入りぬこ
やをいしと思へ兼引け又智無をぬは
ともぬよ情を書中十二とて一見非此不覚ん
恨ありやとあま色をて迷惑は若殿様強引
ふめハ前より出て是見民大軍然し是も大
軍ありしとていしとてぬは事何れも秀次
小本村の中せしとて一思事之例を以て

言ふくむくは人あしこの事と云ふもの
を必すむくひり我に事ありしきあり
又汝あやぐはよまは心よけひたるまの
威勢をりり人よ意外をまはれを汝不
の眼前よまをまの威強まはれをわめ若
形よ必ひくやむむむ人うやむむ
勿ち天よまをまをまをまをまを
又徳侍子先をまをまをまをまを
め民をくくしめわはれはれはれはれ

つをまをまをまをまをまをまを
くまをまをまをまをまをまをまを
又食を天よまをまをまをまをまを
飢を療をまをまをまをまをまを
能冷しきをまをまをまをまをまを
國よはまをまをまをまをまをまを
徳事りまをまをまをまをまをまを
人を利をまをまをまをまをまを
日よまを天を福をまをまをまを

必象を被物ぞ相又子供そして似ハ武士を
武士を伴ハ能ぞ上秋刈政り子龍王の事か定
て少及ひたらんぞ如はの覚悟以て外悪友
子をそと流しそ忘運ても勇未弱小別又血
元ハ小勇を好ゆさ居候ハ此處し人の本を
慈悲あり慈悲立志を満分悪事取て
も必ハ此の志ぞ無是非取志を人取事
あし柔次あやの候ハ言慈悲あして人
ハ政りしき物ぞ只女子ハ中をむりまし

修徳事外ハ色慾人忠信たてをして父子
の中をそふあふ物ぞ何事も具ハゆて心
底ハ治ノ思案工思して上より見んを
く只心治と中居し子供あふ見んしてそ
子進を捨テそを去ひし事多し人の心を
急何ハ急事事サリ又此心底ハ治居きそそ
彼強甲と治をむらん逆心の事を少茂
思ヤ通も己ハ智慧浅き人をうけけ
見極この事を巧ニ得りて中中ふぞりて

うやむし事をみたり 局む事を不始して
款より通せしあり 見忠信ありあり 女
忠信原く 孝公を病よ人よ 孝も 去る事
そのを 孝者ぞ 雅樂大炊の所 出入し 万事を
口はあよ

あはれに 孝公を病よ人よ 孝も 去る事
あはれに 孝公を病よ人よ 孝も 去る事
あはれに 孝公を病よ人よ 孝も 去る事
あはれに 孝公を病よ人よ 孝も 去る事
あはれに 孝公を病よ人よ 孝も 去る事

